

これからの時代とケア——人間の3世代モデルとコミュニティケアへの挑戦

広井良典（千葉大学法経学部教授）

この報告は、2003年3月15日16日に東京で行われた「第7回全国ケアワーカー研修・交流集会」（日本労働者協同組合連合会主催）の全体会（16日）でご講演いただいた内容をまとめたものです。（編集部）



ご紹介いただきました広井でございます。よろしくお願ひいたします。

昨日から熱気あふれる会議が続いており、私どものセッションで最後

ということでお疲れでもありますがお付き合いいただききたいと思います。

「これからの時代とケア」——人間の三世代モデルとコミュニティケアへの挑戦」とありますが、大きく四つ、1. ケアとは何だろうか？、2. ケアのモデル、3. 人間の3世代モデル、4. コミュニティそして自然、という流れでお話させていただきます。

1. ケアとはなんだろうか

まず最初に、ケアとは何だろうか？ということをお話ししたいと思います。昨

日から今日のこの会議でも「ケア」ということが中心的なテーマになっているかと思えますし、「高齢者ケア」や「ターミナルケア」「在宅ケア」あるいは「心のケア」など、「ケア」という言葉を聞かない日はないというほどよく使われるようになってきました。ところが、ケアとは一体どういうことなのか、と改めて考えてみると、なかなかよくわからないところがある。少しそれを振り返ってみる必要があるのではないかと思います。

一つ私が重要な理解ではないかと思うのは、人間というのはいわば「ケアする動物」である、ということです。いろいろな生物が40億年といわれる長い進化の歴史の中で生きてきたわけですが、まず哺乳類以前の動物というのは、ほとんどケアというようなことがない。魚などを考えてみるとわかるように、卵を産んで遺伝子をバトンタッチすればそれで終わり。それ以上親がケアすることはない。ところが、哺乳類になってくると、哺乳というのがお乳をやるということですが、それがよく示すように子どものことを親がケアする、ということが始まります。ただ、哺乳類もまだそれほど

ケアというものが大きな意味を持つとはいえない。それが人間に至って、個体同士がケアし合うということに非常に大きな意味を持つようになる。人間というのはケアする動物であるといってもいいのではないかと思うのですね。

英語で“fragile (フラジャイル)”という言葉がありますが、2年位前にEvery Little Thing (ELT) というポップグループの“fragile”という題名の歌がありました。これは「壊れやすい」とか「か弱い」という意味ですが、まさに人間というのはfragileなものなのです。また「ネオテニー」という聞きなれない言葉がレジュメにあります。これは、「幼形成熟」＝「人間は幼い形のまままで成熟する生き物である」ということを表しています。どういうことかといいますと、人間は他の動物に比べて早い段階でおなかの外に出るんですね。他の動物並みの発達段階で人間が生まれるとしたら、人間の妊娠期間は約21ヶ月くらいになるだろう、という学説があります。つまり十分成熟して生まれるのであれば21ヶ月かかるところを10ヶ月くらいで世の中に出る、つまり非常に未熟な段階で生まれ落ちるのが人間ということです。確かに考えてみると他の動物は生まれてから比較的早く立ち立ちできますよね。人間というのは本当に人に頼らないと生きていけない状態で生まれてくる。しかもその期間がかなり長い。まさに人間というのはケアされてこそ、ようやく自立していける自分というものができていく。だから、小さい時は言うまでもなく、ケアを必要とする環境の中で初めて自分の存在が成り立ち、それがずっと一生続いていくような存在ではないか、と思います。以上、少し抽象的なことでケアということについて

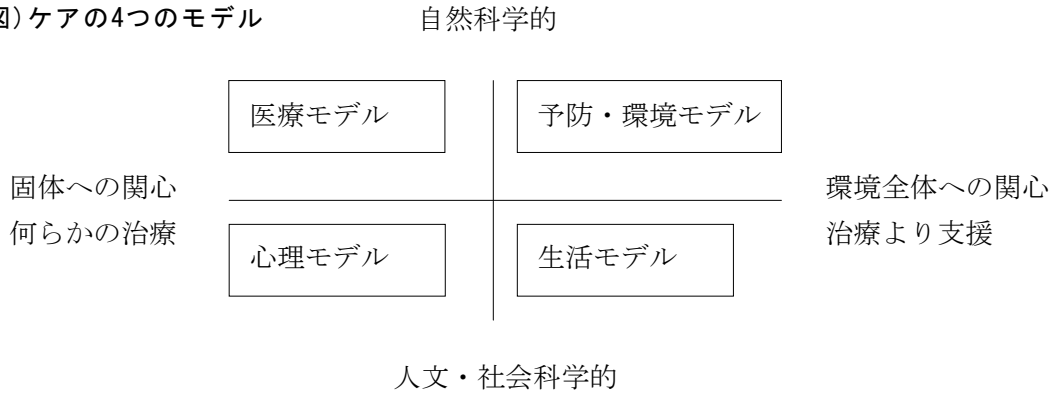
考えてみましたけれども、次にケアということでもう少し具体的に考えてみたいと思います。

2. ケアのモデル

ケアというのはいろいろな分野があるわけですが、医療や福祉、心理、教育というのもケアの一つの姿です。これはこれまでも皆さん方もよく聞かれるかもしれませんが、まず「医療モデル」というのが、ひとつこれまで大きな位置を占めてきました。高齢者ケアではこれに対し「生活モデル」ということがよく言われてきています。「医療モデル」というのは、病気をターゲットにしてそれを治療する。「生活モデル」というのは、病気というよりむしろ障害というように捉えて、それを何でも治療するのではなく生活全体の質を高める、いわゆるQOLを高める。

こういった話を少し広い視点から見ると、もともと医療モデルというのの成立したのは19世紀、今から百何十年前のことで、「特定病因論」というものが成立した。特定病因論というのは、「病気には必ず特定の原因物質がある」ということで、例えば結核なら結核菌、コレラならコレラ菌といった具合に原因物質を見つけてそれを除去すれば、病気は治療できる、という考え方です。これと一体となって進んでいったのが医療モデルです。この特定病因論というのは、感染症の治療には絶大な効果を発揮した。そういうことで、特定病因論や医療モデルというのが非常に強い影響を持つようになったわけですが、その後、病気の構造が時代とともに変わっていく中で、もっと広い視点でケアということを考えていかなければならなくなっていく。

(図) ケアの4つのモデル



感染症→慢性疾患→老人退行性疾患への疾病構造の変化、ということを書きましたが、これは「健康転換」ということがいわれていまして、病気の構造が3段階くらいに変わってきた。最初は感染症が中心、それが日本でいえば昭和30年前後に慢性疾患中心の段階に入る。具体的にいいますと脳卒中、ガン、心臓病が死因のベストスリーに並んだのが昭和30年代ですね。さらに90年代くらいになると、慢性疾患もさることながら、いわゆる高齢者ケア、老人退行性疾患が中心になってくる。今、日本の医療費のすでにすでに50%が70歳以上のお年寄りの医療費ということになってきています。慢性疾患や老人退行性疾患というのは、もう感染症とは全然違って、あらゆる要素が長い期間に渡って積み重なって病気になる。一つの原因物質を見つけてそれを除去すれば、病気が治るというのではなくて、無数の生活面や社会的な面、対人関係、心理的な要素が合わさって、その結果として病気や障害になる、ということですので、医療モデル＝特定病因論という考え方だけでは、とても対処ができなくなっている。それでもなお、この特定病因論的な考え方が今の医療や福祉では強い影響力をもっています

けれども、こういった視点を少し考え直していかなければいけないと思います。

“複雑系”という言葉を書いていますけれども、“複雑系”というのは最近の科学で言われるようになったことです。今までの科学というのは単純な因果関係に還元して捉える、ところが、そうではない現象がむしろ世の中では多いということがわかるようになってきた。例えば、天気予報や気象の予測、地球環境問題など、自然現象というのは科学が考えているほど単純な単純な因果関係ではわからないということが逆に明らかになってきた。そういう目で見てみると、人間の体というのは地球環境より複雑といいますか、“複雑系”の典型的なものでありまして、いろいろな要素が絡み合って病気や障害になったりする。そういう意味では、医療モデルというのは一つのモデルでありますけれども、レジユメの図で示しますと医療モデルの左上から右下の方へ、感染症のときは医療モデル、慢性疾患のときは予防・環境モデルや心理モデルが重要になって、さらに高齢者になると生活モデル、つまり生活全体、コミュニティ、社会とのつながりというのが大きな割合を占める。このように左上の方から右

下の方へ広がって変化してきている、という少し広い視点でケアということを考えていかなければならなくなっているのではないかと思います。

3. 人間の3世代モデル

先ほど、高齢者の多世代の交流について「ケアホームなごみ」のお話がありました。それと関連する内容で人間の3世代モデルというのをお話させていただきます。

先ほどの、人間は非常にか弱い状態で生まれてくる、という話ともつながりますけれども、人間の一生(ライフサイクル)というものを考えてみたいと思います。一般に生物のライフサイクルは成長期、生殖期、後生殖期の3つの時期があると考えられています。生殖期というのは、子どもを産むことができる性的に成熟した年齢ということで、成長期から生殖期、これは大人というのに関係していますが、さらにその後に後生殖

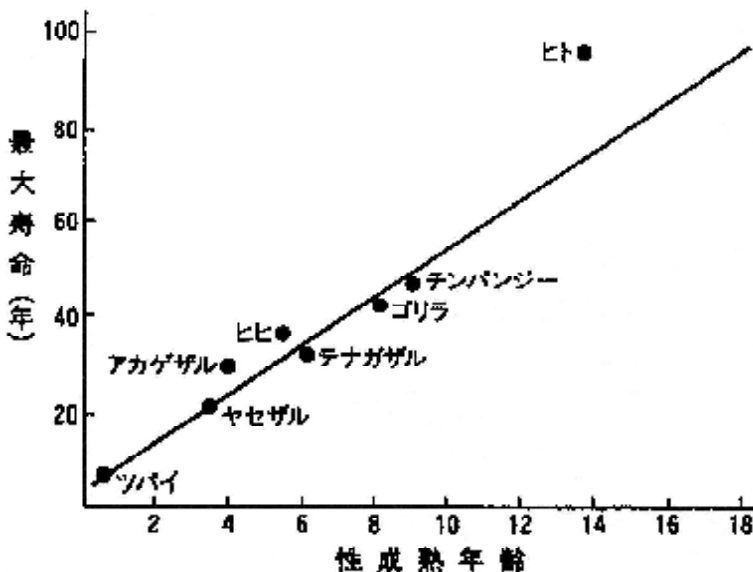
期というのがあります。

資料をご覧くださいと、「最大寿命と性成熟年齢との関係」という図がございます。これはいろいろな動物、横軸が主に哺乳類と人の性的に成熟する年齢、これは先ほどの成長期から生殖期に移る、人間でいえば思春期の頃、縦軸がその生物の最大寿命ということですが、他の動物に比べて人間が少し特別な場所に立っていることがわかると思います。他の動物に比べて性成熟年齢に対して最大寿命が長い。これはどうしてか、と考えると、人間はやはり後生殖期が長い。後生殖期というのはそのまま高齢期ということです。人間という生き物はもともと高齢期というのが長くできてしまっているんですね。これが他の動物にない特徴です。わかりやすい例では、サケなどは産卵するために川を遡って行って、産卵すると自分自身は朽ちるように死んでいく。他の生物の場合は生殖を終えると、言い換えると自分の遺伝子のコピーを後の世代にバトンタッチすると、個体としての役割は終えて死んでいく。ところが、人間に限っては

後生殖期が長い。高齢期がもともと長いというのが人間という生き物の特徴といえると思うんですね。

では、私どもが迎えようとしている高齢社会というのはどういう社会かという、まさに人間特有の後生殖期＝高齢期がいわば普遍化する、だれもが豊かになって後生殖期を全うすることができる時代と考えることができる。高齢社会というと社会保障、医療費や年金が大変、というよう

(図)最大寿命と性成熟年齢との関係



(出所) 今堀和友『老化とは何か』岩波新書

に悲観的に言われることが多いわけですが、そういう視点から考えると、大げさに聞こえるかもしれませんが、高齢社会というのはむしろ人類史の到達点と言ってもよく、人間特有の高齢期が誰でも生きられるよう普遍化する時代というのが高齢社会、ということができるのではないかと思います。

ところが、またちょっと疑問が生まれるのは、ではなぜ人間という生き物は高齢期が長いのだろうか、ということです。どうして生殖を終えた後でも長い期間を生きるようにできているのだろうか、という疑問が浮かぶかと思えます。私はそういうことを考えてきて、こういうことが言えるのではないか、ということを経年前から思うようになっていたのですが、それが人間の3世代モデルということです。

人間というのは3世代構造(子ども・大人・老人の時期)を持つということにかなり本質的な意味がある、そういう生き物なのではないか。どういうことかということ、子ども・大人・老人の役割を漢字一文字で考えてみると、大人というのは「働(産)」というのが主たる役割だろう。子どもというのは「遊」+「学」。ここでいう「学」というのは決して受験勉強みたいな意味の学ぶではなく、「遊」と「学」が一体になっているような、遊びを通じて学ぶこと、何にでも好奇心をも示して学ぶことだろう。高齢期というのは「遊」+「教」となる。つまり、子どもと高齢者は割と対の関係にあるといえますか、いわゆる朝から晩まで会社で働くのからは解放されていて、そういう意味では「遊」なんですけれども、昔は大人は忙しくて、老人が子どもに生活の知恵や昔話などいろいろなことを教えていた部分が大き

かった。先ほど fragile として人間は子どもの時期が非常に長い、また、人間は高齢期が長いというお話をしました。一見、生産ということからすると、無駄にも思えるような時期が長いというのが人間という生き物の特徴で、まさに子どもと老人の時期に人間の創造性の源があるのではないかと。逆に生産性や効率性からは自由な時代が長いところに文化や創造性の源がある、そういう発想で考えていけないだろうか、ということでもあります。

もっと高齢者と子どもの関係を大事にしていけないか、ということで98年くらいから、「老人と子ども」統合ケアという調査研究を行いました。そういうことを考えるようになったいろいろなきっかけがあったのですが、例えば、大学の社会保障論のゼミで学生を非常に立派な老人ホームなどに連れて行ったりすることがあるのですが、学生から「施設やケアの質は高いのだけれども、何か足りないような気がする」という意見が出たりします。高齢者だけが一緒のところ集まっているということに、何か疎外されたとか孤立している感じがあると。そういうことを考えると、やはり他の世代や地域に対して開かれている、というのが先ほどの「老人と子ども」の特別な関係ということを考えても大きいのではないかと思います。

『夏の庭』(湯本香樹実)という児童文学があります。課題図書にもなったのでご存知の方もいるかと思いますが、3人の小学生が主人公なんですが、近所に独りで暮らしている頑固なおじいさんがいて、最初はからかっていたりしているんですが、だんだんそういう中から交流が生まれて、最後はそのおじいさんが亡くなるんですが、その主人公

の子どもたちは「天国に知り合いができた」ということを言うようなところがあったりして、非常に考えさせられる作品です。その他にも児童文学を見てみると高齢者が子どもにとって非常に大きな意味を持っているという話はたくさんあります。

ということで「老人と子ども」統合ケアというのを調査してみました。ひとつこの分野で私の知る限りかなり先駆的に以前からやっておられたのは、中野区にある「おもちゃ美術館」という取り組みです。多田千尋さんという方がお父さんが始められた活動の2代目として館長をされていますが、関心があればぜひ行っていただければと思います。このおもちゃ美術館をいろいろな福祉や医療施設につくろうということで、今2、30箇所にはなっているでしょうか、有名なところでは横浜の「さくら苑」や市原の「日夕園」などの老人ホームにおもちゃ美術館をつくって、そこに地域の子どもが自由に出入りできるようにすることで、雰囲気が変わってくる、という事例があります。では、「具体的にどういう効果があるのか」が実証的に示されないのか、ということで子どもは調べたりもしました。熊本市にある天寿苑という特養ホームでは、こういった試みを積極的にやっていて、そこの観察記録を少し追ってみますと、やはり高齢者にとっても子どもにとっても効果があるのですが、特に高齢者にとってプラスの効果が見れるということが示されました。したがって、「老人と子ども」統合ケアというのは、これからいろいろな形で考えていっていいと思います。諸外国も少し調べたのですが、フィンランドで「老人と子ども」統合ケアというものを政策として実験的に進めていたりします。

ただ、あまりこれだけに絞る必要もなく、要するに結局ここで浮かび上がってくるのはコミュニティということだと思うんですね。老人と子どもの交流が大事だからといって、無理やり子どもを老人ホームに連れて行ったらいいかのというと、単発的なものであれば慰問で終わってしまいますし、そんな単純な話ではなくて、やはり日常性というか自然さというか、コミュニティや多世代に開かれているケアのあり方が重要なのではないか、と思います。

一昨年から去年まで、大学から海外研究の機会をいただき、非常に感じたことは、特にヨーロッパでは街に高齢者が多いということです。例えばカフェとかにですね。日本で最近カフェというのが増えていますが、大体若者が中心です。それからパブとか市場に非常に高齢者が多い。日本の街は若者や生産者を中心にできてしまっているのではないかと。昔はそうではなく銭湯などもあった。先ほど資料を見ていましたら、銭湯の試みが出ていましたが、最近はデイセンターならぬデイ銭湯というものもあるそうです。東京では「大江戸温泉」などができたりして、温泉が見直されたりもしています。ですから、そういった気軽に高齢者のいける場所が最終的には非常に重要で、そういう意味では福祉というものをあまり狭く考えなくてもいいのではないかと。昨日、今日の話やこの後の大槻さんの話にもあるかと思いますが、もっと社会全体というか街全体のあり方として考えるテーマではないかと思っています。

コミュニティについて一言補足いたしますと、戦後の日本、特に高度成長期の日本というのは、圧倒的に「カイシャ」と「核家族」の2つのコミュニティに収斂されていたと

思うんですね。特に男性は会社が圧倒的な帰属する場所で、女性は家族と多少の地域です。非常にこの2つに収斂されていて地域コミュニティや他のコミュニティが失われていった。ところが、会社は終身雇用で非常にしっかりしたコミュニティだったのが今はどんどん崩れて、終身雇用が当然の前提ではなくなってきていますし、核家族むしろ個人が単位になりつつある。そういう中で、「コミュニティ力」というのが非常に低下しているわけで、それをどのように作り直していくかというのが、日本社会の非常に大きな曲がり角になってきていると思います。また、今日は時間の関係でそのお話をさせていただく余裕がありませんが、社会保障というのも、要は核家族やコミュニティの中で行われていたことが、個人単位の社会になっていく中で弱くなっていくのを、もう一度社会の制度として再構築していく、という趣旨のもので、社会保障のあり方とも関係してくるかと思えます。

4. コミュニティそして自然

老人と子どもや人間の3世代の話からコミュニティという話になったわけですが、私としては今日の話でもうひとつ強調しておきたい点があります。人間個人にはコミュニティが必要なわけですが、もうひとつコミュニティの底には「自然(環境)」というものがあるわけです。実は先ほどの「老人と子ども」統合ケアの後に私どものグループで研究を行ったのが「自然との関わりを通じたケア」というもので、ケアの中に「自然」という要素を取り入れていけないかということです。

最近「定年帰農」と言うようなことがい

われるようになってきているんですね。『現代農業』という雑誌の増刊号の表紙を見ると「6万人の人生二毛作」「60歳以上の新規就農者は年々急増。95年には新規就農10万人のうち、60歳以上が6割＝6万人を占めた。」とあります。退職したサラリーマンが程度の差はあれ農業や自然との関わりを求めている。夫の方が熱心で奥さんはそれほどでもない、ということも結構あるようですが。それから、もともと園芸療法などというものがありましたし、「自然との関わりを通じたケア」の報告書を読んだという滋賀県八日市市の職員の方が送ってくださった「森から考える福祉フォーラム」という資料が入っていますが、ここには「自然環境と福祉の融合」ということがうたわれています。これは自然を舞台に高齢者や子どもや多世代が交流したりデイサービスセンターがあったりというもので、おそらく今後こういったものが非常に重要になってくると思うんですね。それから、多少手前味噌になりますが、いま千葉大で「高齢化社会環境情報センター」というものをやっているのですが、これは医療や福祉関係の患者会やサービスをやっている団体と環境系の団体、主に6団体の資料室兼交流スペース兼相談スペースのようになっています。例えばガン患者会のグループの方が「森のサミット」という植林をしている団体の活動に参加して、非常に心身が癒されたような経験をしたということがあります。これまで福祉・医療系の世界と、環境とか自然関係は近いように見えてあまり交流がなかったわけですが、これからは「自然」という要素をどう取り入れていくかというのが、非常に大きな意味を持つてくるのではないかと思っています。

この「自然との関わりを通じたケア」につ

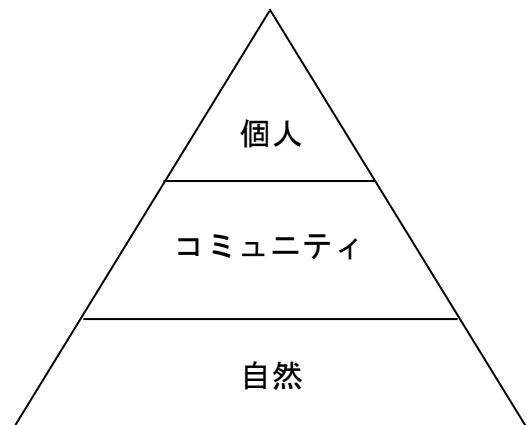
いて、少し補足をしますと、日本人にとっては、自然というのは単に物理的な意味の自然というのではなく、今、福祉や医療の分野で「スピリチュアリティ」ということがよく言われるようになってきているといいますが、日本人の感覚というのは自然そのものの中に何かスピリチュアルなものが感じられるということがあり、さらにはターミナルケアというか人生を生きて死んでいくその時の「魂の帰っていく場所」としての自然が考えられます。

そういったことでは、コミュニティと並んで自然という要素を意識していくと、またいろいろな視点から世界が広がっていくのではないかと、思っています。もちろんそれが介護予防という面から見ても重要になっていくのではないかと思います。全体としてみると、一般に介護問題とか高齢化問題とかいわれることの大半は、寿命が急速に伸びたことに社会のシステムや人々の価値観が追いついていないことからズレが生じて、いろいろな問題になっていると思いますので、その辺りをもう少し大きな長い視点で捉え直していくことが必要なのではないかと思います。

時間も過ぎてきましたのでまとめの段階に入りたいと思いますが、最初にいろいろなケアのモデルとして医療モデルから心理モデル、予防・環境モデル、生活モデルというお話をしましたけれども、生活モデルというのも3段階くらいあるのかな、と思います。最初の段階というのは病気の治療というだけでなく、障害を認めながら生活全体をみていくモデルとして、今は介護保険などで進んでいる介護サービスを拡充していくというところで進んでいるものです。そ

れから第2段階としていけば、受動性から主体性へということで、高齢者が受動的な存在としてただケアを受けるだけではなくて、社会的な役割を発揮するとか、高齢者同士の相互作用ということで、グループホームやそれに関連した動きの中で実現されつつあります。さらに、第3段階として、コミュニティ／環境に開かれたケアということで今までお話してきたようなことが、これから求められている時代になっているかなと思います。

(図)個人—コミュニティ—自然の関係



三角形の簡単な図を書いています、個人のベースにコミュニティがあり、さらに先ほど言いました自然というものがあり、さらに日本人的な感覚ではスピリチュアリティというものがその底に存在しているということになります。やや理念的な言い方になりますけれども、コミュニティと自然とスピリチュアリティが揃えば理想的なケアの姿ということができるのではないかと思います。

ちなみに今日は触れられませんが少し補足しますと、これからはターミナルケア＝看取りのケアというもののつながりが強く

なっております。これまではターミナルケアというとガンのターミナルケアの議論が圧倒的に多かったわけですが、今は、長い介護期間の先に看取りがあるような高齢者のターミナルケアが急増しています。そうするとターミナルケアというのも医療だけの話ではなくて広い意味の福祉的な関わりが非常に重要になってくる。「福祉のターミナルケア」ということも言ったりしているわけで、これはまた大きな課題ですが、ターミナルケアも先ほどからお話しているような、広い視点で捉え直していく必要が時代ではないかと思えます。

今、年間に亡くなる方の数が急増していて、93年に約20万人だったのが2010年には倍以上なると言われており、その大半が85歳以上の後期高齢者なのですが、先ほどの高齢者ケアの話は、看取りとか定年帰農など望ましい老い方・死に方など広い視点で捉えていく必要があると思えます。

5. おわりに：これからの時代＝定常型社会とケア

最後に、これからの時代というのは、私なりに理解しますといわば「定常型社会」というような社会になっていくのではないか、と思えます。戦後の経済成長と物質的な豊かさ・富を追求するところから、これだけ物質的には豊かになった中で、それに代わる価値が見出せないでいるのが一番の課題になっているのではないか。定常型社会というのは、経済成長を絶対的な目標にしなくても、もっと新しい道＝豊かさが実現されていく、ということです。消費というのも物質エネルギーや情報の消費から時間の消費ということが大きくなっていく。自分自身

が納得・充足できるような時間を過ごす、ケアというのも時間を共に過ごすというのが大きな意味を持っているかと思えますが、時間の消費ということが人々にとって一番大きなものになっていく時代ではないかと思えます。最近「スローライフ」ということもよく言われるようになっていますが、こういったことも関わってくる。飛行機に例えて言うと、これまでは何でも経済成長ということで自然やコミュニティから「離陸」していく時代だったのが、いわば「着陸」というか、コミュニティや自然につながる着地点を見出していくことになっていくのではないか、と思えます。

ケアとは何か、からケアのモデルや人間の3世代モデル、高齢者と子どもの関係、自然、スピリチュアリティや定常型社会といった、あまりまとまりのない話となりましたが、以上、私からのお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。